

氏名・(本籍地)	宮部亮侑(東京都)
学位の種類	博士(仏教学)
学位記の番号	甲第57号
学位授与の日付	平成21年3月16日
学位論文題目	<b>三観思想の基礎的研究</b>
論文審査委員	主査 多田孝文 副査 多田孝正 副査 塩入法道

## 宮部亮侑氏 学位請求論文審査報告書

### 「三観思想の基礎的研究」

#### 論文の内容の要旨

本論文は、第一部「中国仏教における教相と修道」、第二部「三観思想の基礎的研究」との二部で構成されている。

第一部は、天台大師の三観思想を考察する前提として、大師が教相と修道とを構築する基盤となったものを論究している。

第一章では、菩薩の修道論、特に頓悟をめぐる考察である。まず、頓悟義の登場として、中国仏教において最初期に顕れた支道林・釈道安の頓悟、いわゆる七住頓悟を主張する「小頓悟義」を紹介している。次に、羅什とその門下の僧肇と竺道生の主張を検討し「大頓悟」と呼ばれる頓悟義を考察し、天台大師の修道論の大枠が、この「大頓悟」の系列に属するものであることを暗示している。

第二章では「天台大師智顛の經典観」であって、特に『維摩経』を中心として述べられている。ここにおいて、本論文が大師の維摩経疏を中心として考察が進められることが明らかとなる。

ここでは大師の經典観を『法華玄義』によって南三北七の維摩経観と、大師の見解を比較検討としている。次に『維摩経玄疏』の経体に注目し、「不可思議真性解脱」とは何かを解明している。

第三章では、天台の観門をめぐる考察である。ここで本論文の中心課題が「通相三観」の究明であることが示されている。

はじめに『摩訶止観』の釈名を整理し、止と観、特に観の持つ意味として「観達」と「観穿」の両面を持つことを解明し、これによって中道佛性にいたるのであると述べ、「相待の止観」について、「不可思議の止観」の表明と、三徳との重層的な解釈の有様を解明している。

ここ迄が、本論文の序に相当すると思われる。

第二部は、「三観思想の基礎的研究」であり、これは本論文の主論題である通相三観を中心に、大師の三観思想について述べる。

第一章では「三観の諸相」であり、ここでは通相三観を述べる前提として、三種三観についての規定を

整理している。

別相三観・一心三観や従仮入空観・従空入仮観・中道第一義観といった三観は大師の著述に散見されるが、ここでは『三観義』を中心に、境と智の分別を確認し、更に別相三観と一心三観における従仮入空観・従空入伝観、中道第一義観の関係を解明する。

次いで、三種三観が説かれる『維摩経文疏』問疾品において通相三観が説かれる基盤として「権疾」「実疾」について論究している。これに関連して四土説と衆生の本性が論じられている。

更に、通相三観とは何か、それを廻って四教と三観の関係、通相三観と円教の関係を解明している。

第二章では、「中国天台諸師における通相三観釈」である。ここでは荊溪大師湛然の理解として、通相三観の次第性と総相三観という観点から、孤山智円の理解として通相三観と被接、通相三観の「定判」という面から、法照の理解を、正傍の二義、通相三観と大乘の立場という点から、各々の思想の究明を行っている。

第三章では、日本天台諸師における通相三観釈である。ここでは、まず宝地房証真の円教観と通相三観釈、慧澄痴空と大宝守脱の円教観と通相三観釈を論じている。

第四章では、「天台大師の通相三観釈」と題して改めて大師の通相三観の思想を、衆生空、法空、平等空、通教と円教、通相三観との位置という項目によって解明しようとしている。

第五章では、「天台における慈悲をめぐって」は大師が通相三観を表明した背景となるとされる慈悲に焦点を当て、浄影寺慧遠の慈悲の解釈と比較し、天台大師の無縁の慈悲とは何であるかを究明する。

以上、第一部の三章、第二部の五章にわたる各論考は、鄭寧に進められている。

ただし、インドではなかった教相とか教判といわれる概念の捉え方についての考察が必要であった。すなわち、教判を菩薩の自行の因果の中に納めるか、または化他對機のための分別説と捉えるかである。中国仏教が教判にかかわってきた点をもっと深く考察することは課題として残った。

## 審査結果の要旨

本論文は「三観思想の基礎的研究」と題し、特に『維摩経文疏』に述べられる通相三観を手がかりとして、大師の仏教の本質は何かという点を究明する意欲的な研究である。

従来、通相三観は『維摩経』に対する天台大師の注釈書においてのみ登場するので、五時入教の方等教という観点に立って論じられることが多く「文疏」の「相通三観は通に約して円を論ず。此れ恐らくは方等教にして方便を帯びるの円なり。法華に明かすところの如きに非ず。」という大師の文章を一家の規範とし、これを教判論の中で消化し、大師の仏教の本質は何かという視点に立って、改めて大師が何を訴えようとしたのかを解明しようとする努力がされてこなかったように思われる。

本論は仏教理解の基礎的立場に戻って真摯にこの問題に取り組んだものである。

第一部において、論者は頓悟に関して、“小頓悟は経典に説かれる十住説を前提としてどの段階で悟るか、大頓悟は悟りの本質は何かという、まったく別の次元ものが論じられたもの”と述べ、大師の立場は大頓悟に属するものと見ている。

それを踏まえて“大師は『維摩経』の経意が教相を明かすことではないとし、教相論が積極的に説かれておらず、更に、大師は『維摩経』の経体を「不可思議真性解説」とするのが、その異名として「諸法實相」「中道第一義諦」「法性実相」を挙げている。これは大師の五時の分別によれば『維摩経』は蔵教から円教まで説かれる方等時の経典に位置づけられているが、そのなかには諸法實相が説かれるという、広範

な大乘經典觀を見せている、と述べる。

また、觀門という視点からは『三觀義』の觀穿、觀達することで、中道仏性に至るとされ、しかもこれは「相待の止觀」の意であり、大師は「悉く皆不生」であるとして「絶待の止觀」を規定し、これを「不可思議の止觀」であり、絶・大・不可思議は四悉檀を用うれば、三徳に配当され、不豎不横であるという重層的解釈がなされていると結論した。

第二部の「三觀の諸相」において『三觀義』を中心に、因縁所生法が『維摩經』で明かされる「不思議境」であり、三觀は前二觀を方便道とし、二諦を見て中道に入るものが中道觀であるが「一時平等」とされるので、中道觀のみを取り上げるのは不可能であるというのが、三觀の基本構造であると述べる。

一心三觀は、円教の利根の菩薩が修するとされ、初心に一心三智を得て仏性をみるとされるが、一心三觀は大乘を会乗するものであるとされ、大師は、一心三觀が円教であり、大乘であることを強調するという。

通相三觀は、維摩經問疾品の釈に登場するが、この品は折伏から摂受へと転換すると理解され、衆生の実疾は、「因果の病」で、この病が「畢竟清浄」であるとされる衆生の本性に生じる。この病を四教と三觀によって断滅するのであるが、三觀は、とくに利根である「法行の人」に対するものであると述べる。

通相三觀は、一心三觀と同じ円教の觀法である。しかも通相三觀によって『維摩經』を解釈することは、『法華經』以外の大乘經典も諸法実相を経体とし、円教という基盤をもっていることを強調しようとしたと考えられる、と主張する。

第二章の中国諸師の解釈において、大師以後、五時入教の教判論が主流になるに伴い、通相三觀は、複雑な解釈が行われるようになって行った様相を示しているものである。

まず、湛然は、『法華經』と方等經典とを区別するよりも、「大乘」という視点に立って円教である通相三觀に「円中の別相」と述べて、次第性を認める別教的性格があることを主張すると解明する。智円については、被接を前提とした解釈をすと云い、法照は、通相三觀と正傍二義で分別し、湛然を正、智円を傍とし、山家、山外の違いは問題にならなかった、と論じている。

第三章では、日本における解釈が中心となっている、宝地房証真は『法華經』で説かれる円教と、他教で説かれる円教では、教に約せば、同じく円教でも「部」に約せば、開権顕実の円と異なるという、円教の二重性について指摘し、この違いは、衆生の機根の差異のためである、と指摘している。

また、証真は、文に権教を含みながらも円教を明かす觀法が通相三觀であり、『法華經』以外の大乘經典に円融の三諦が説かれていないとする見解は、天台一宗ではないと強調する、と述べている。

それに対し、慧澄は、証真の釈は、実相と教用との意味が明確でないを批判し、通相三觀は『維摩經』を解釈するため、広く大乘經典に会通出来ない、と述べ、大宝は開会の問題として捉え、円教に転ずる機会を導くために説かれたもの、と述べているとする。

中国天台においては、大乘を前提とした被接と円教の関係から、日本天台においては、尔前と『法華經』における円教の問題から、通相三觀が論究されて来たかと推察されると、表明している。

第四章は、これまでに解明したことを踏まえながら、大師の通相三觀を再度究明している。

大師は通相三觀の從仮入空觀の釈で、衆生仮・法仮・平等仮から、この三法から入空するものであるが、維摩經問疾品の「空病亦空」を平等空と解釈する。これは生死と涅槃の二辺を平等と捉えて、体空觀で入空するものである。そして、空病を空と捉えることを「中道を見る」とする。空病を空と知ることが中道を見ることになるという、別円二教の「円真」である見解との違いを指摘する。但し「円真」ではあるが、別教は、証道同円であると云っても、涅槃を常住から理解する立場であり、通相三觀によって中道を空か

ら捉える円教の立場と若干の違いが指摘出来る、と云う。

通教は藏教とともに「偏真の理」に入るとされ、中道仏性が説かれられないということが大前提であるが、一方、大師は通教と円教の連関を被接の立場からも説いている。

大師は大乗經典をすべて諸法実相の一法印で捉える立場に立ち、通相三観を示すことによって、通教が用いられるなかで、実際は円教が説かれていると「文疏」によって提示したと考えられる、と一応の結論を示している。

第五章では、「文疏」に述べられている慈悲と通相三観の関連とについて述べている。

維摩経観衆生品の釈において、従仮入空観を説くが、それは、人が理解しやすくするために、実際は、そこに三観が具されていると述べた後、慈悲を論ずるのである。

衆生が如幻即空であると観ずることについて、大師は、維摩が空を説くことは、菩薩が観ずる「三諦の空」を説いているのであって、それが慈悲であるとする。

維摩が、自身を観じて三諦の空と体観するのが自行であり、それを衆生のために説くことが衆生に中道を自覚させ与樂する、化他となることを示しているのである。

それによって衆生の本源の畢竟清浄を理解させることが真実の慈悲であり、「無縁の慈悲」であると云っている。

こうした解釈を大師は通相三観によって導いたのである、と解明して本論は了るのである。

論者は、天台大師の經典観は、大乗經典は諸法実相の一法印が説かれる「大乗了義経」であるといった、広範な視野のもとに構築されている、との認識のもとに論旨を展開して来た。啓発を受ける箇所も多く存するし、明確過ぎる程、筋道もしっかりしたものだと思う。片や天台教学は、千五百の歴史を以って、多彩な教学に色どられていて、なかなかその本質を見定めることが困難である。筋道だけではなく枝葉の部分を加えることによって、読み手の共感を得る様な修法を開拓して行かねばならないだろう。法説周だけではなく、譬説、因縁周も駆使し、更には思い切って、現近代の原始仏教研究の成果なども取り入れることも必要となるのではなかろうか。

また、中国文化にとって仏教とは何なのか、という研究もそう進んでいるようにも見えない。天台大師に至るまでの仏教史も一応歴史上の転変をたどっている丈のような気もする。

教相であるということに対する今迄の見解を見直す必要があるであろうし、教と観、自行と化他など数々のテーマを再検討して行く必要もあるであろう。

すなわち、尔前と法華開会の問題に関しても通、別の五時を手がかりにして究明しなければならない。釈迦仏による開会以前に、すでに大通智勝仏や日月灯明仏等が法華を説いて開会を行っている。多宝仏の出現は何を意味するものか考察する必要がある。中国において文字は我々が考えている以上に重要なものである。それが經典至上主義へと歩むのであろうが、『法華経』には「乃至一偈によっても成仏する」とも述べられているのである。

『法華経』最大一とする純一の大乗經典は存在するのか、法華最大一という純一とは、何を指しているのか、など考察が必要となる。

既成の概念を破りながら研究を進めないただ論の積み重ねになって説得力を持たない。少し昔流の言い方をすれば、もっと哲学をなささいということになるだろう。

しかしながら、それらは今後、取り組むべき課題である。

新しい時代に新展開する仏教が待望される今、勇気を持って前を向いて進んで欲しいし、期待している。

以上、本論文は教・観にわたる幽玄な思想の解明に取り組み、緻密な論考、探求を重ねた成果は課程博士論文として十分認め得るものである。